

知 覚 の 構 造

——「知覚の哲学」試論 その一——

種 村 完 司

(1988年10月14日 受理)

Die Struktur der Wahrnehmung

—— Versuch über “die Philosophie der Wahrnehmung” I ——

Kanji TANEMURA

I. 「知覚の哲学」は可能か

1) われわれ人間は何をどの範囲でどれほど確実に知ることができるのか、という近代認識論に固有の根本的な問いが、デカルト、ロック、カントなどによって自覚的に追求されたとき、人間の認識能力（より正確には、認識様態）のなくてはならない一部である「知覚」は、そのつど最もたいせつな分析の対象になってきた。

「知覚」という概念がふくむ内容を、感性的知覚に限定するにせよ、またはそれを一種の知的な理解をもふくむ広義の認識様態とみなすにせよ、それが、人間のさまざまな感覚器官を通しての、かなり直接的な対象認知であることは、ひとつの常識に属するといっている。

この「感覚器官を通して」ということ、「直接的な対象認知」であるということ、まさにこの二つのことがさしあたり一般的に気づかれうる知覚の特性であってみれば、それゆえにこそ、人間の認識の範囲や普遍妥当性を問うにあたって、知覚がまず第一に注目されとりあげられる理由ともなるのである。なぜなら、知覚の主体である身体は、あるいは局所的にあるいは遍在的に諸感覚器官を所有している（正しくは、諸器官を統合している）ものであり、感覚器官をもたない身体をわれわれは考えることができないからである。また、対象についてのまず直接的な認知が妨げられるとするなら、対象の本性に少しも近づくことができず、したがってより複雑で高次の知識なぞ期待しようがないからである。

それにしても、認識過程のはじまりであり、知識の源泉であるこの「知覚」という作用によって、いったいわれわれは、対象のどういう側面を、どの程度の確実さでもってとらえることができるのであろうか。

これには当然二つの立場が考えられる。じっさい哲学史上に現われた多くの主張の中でも、以下

の二つの見方——純粋な現われとはいわないまでも、いずれかに重きをおいた見方——が交錯し、ときには互いの間で深刻な争論が起ってきた。

一つは、知覚を認識すべき対象のごく表面的で部分的な認識とみなし、対象の本質をとらえるには、高次の知性（悟性と呼ぶにせよ、理性と呼ぶにせよ）の概念化のはたらき、判断・推理の作用をまたねばならず、それによって知覚の初歩的な成果も克服されねばならない、と考える立場である。もう一つは、対象のとらえがたい特質や構造も人間の知覚によって直接的に明るみに出されることができ、ある一定の時と場所ではそれに制約されて対象の部分的な認識にとどまるとしても、知覚の長い系列の中で対象の本質はあますところなく表現されうる、とみる立場である。

前者は、知覚と対象の本性との間に越えがたい深淵をおく見方であり、後者は、対象の本性を知覚の作用や結果に帰着させる見方である。前者には知覚への根強い不信があり、後者には知覚への楽天的な信頼がある。

知覚のはたらきにどれほど多くの期待を寄せるかどうかは別にして、ともかくこれらの立場は、知覚を対象認識の一つのあり方とみなすものであって、両者の間の相違や対立も、知覚が対象をどのくらいの広さでどれほど正確にとらえることができるかという、いわゆる認識論の土俵の上でこそ生まれている。

ところが、後者の知覚観をうけつぎながら、知覚を認識作用としてではなく、むしろ対象の存在のしかた、世界のありかたという、いわば存在論のレベルにまで拡張して理解しようとする立場がある。それは、知覚と結びつかない客観的な事物の存在を承認しない立場であり、論理的により徹底すれば、事物はそのまま知覚現象だとみる立場である。この考えからすれば、知覚の系列に入っていない事象は無であり、知覚現象とは別にその外部や背後に「物そのもの」や対象の本質・現実性を想定することは背理だということになる。

認識作用としての知覚と知覚がもたらす存在現象とを区別せず、対象や世界をそのまま知覚対象・知覚的世界とみなす主張を「知覚一元論」と呼ぶことにしよう。この「知覚一元論」は、いうまでもなく、「事物の存在することは知覚されることである」と言いきったイギリスのバークリーにまでその起源をさかのぼることができるだろう。しかし、これほど極端ではないけれども、この病弊は、現代の多くの哲学に浸透し、その髓を深く冒している。事物の実在性を知覚現象の系列に解消するフッサールや、メルロ=ポンティの現象学がそうであり、世界を感覚の束とみたり（マッハ）物質的事物を感覚的内容からの論理的構成ととらえたり（エイヤー）する実証主義的経験論がそうである。

知覚と存在との一体化に固執する立場は、知覚に絶大なしかし不当な権威を与えることによって、対象認識の過程で知覚がはたすべき役割や知覚がもたらす確実性等にかんする認識論上の根本問題を、きわめて希薄にしてしまった。

それ自身知覚でないような対象は存在できず、それゆえ世界の一つひとつのできごとがすべて知覚なのであるから、そこには作用としての知覚と存在としての事象との間に、同じことだが知覚す

るものと知覚されるものとの間にまったく疎隔がない。すべてが知覚であるところでは、知覚された内容が確実であるか不確実であるかも問われえない。知覚は自らの外に時にはきびしい忠告と助言を与えてくれる他者を失うことによって、換言すればありとあらゆるところに自分しか見出しえなくなることによって、自らの本性を、つまり自らの強さも弱さもとらええなくなったのである。他者をのみこむ知覚の全能化は知覚の品位を喪失させた。これはまさしく知覚の不幸である。知覚一元論にむしばまれつつある現代の主観主義や現象主義は、この不幸を誠実にうけとめていないし、うけとめることができないでいる。やはりこれは、憂うべき病弊ではないか。

人間に特有のこの知覚のはたらきを過大にも過小にも評価せず、その生まれてくるがままの姿で、その特性とそれがもたらすものとを先入見なしで見すえてみよう。そうすれば、知覚という事象は、それ自身の歴史をもつ過程であり、有機的な構造をもっており、しかも他のものによって媒介され支えられ、それゆえ多くの諸連関の中で生きていることが、しだいに明瞭になるはずだ。

ここから、知覚に関するじつにさまざまな哲学と科学の課題が発生してくる。

過程としての知覚、という側面では、一つに人間的感性の発生史・形成史が問われ、二つに、個体発生的な観点からの感性・知覚的意識の発達過程がとりあげられるであろう。そしてもちろん、対象認識の過程における知覚の意義と役割が、知覚作用のはじまりからその終わりまでの全期間にわたってくわしく解明されねばならない。

構造体としての知覚、という側面では、知覚はけっして単純で平板なものではなく、対象的事物と人間的認識能力との複雑な交互作用であり、いわば「複合体」であることが示されることになる。とくにここでは、知覚の基本的な構成要素だといわれる「感覚」、意識の統一性や反省の主体である「自己意識」等がどのように統合されまた互いに補完しあうのかについて、事実にもとづく説明がくわえられなければならない。さらにいえば、カントが提起した、空間や時間という直観形式、思惟形式としてのカテゴリーなどの認識の主観的条件が、知覚の作用や結果のうちでいったいどんな意義をもっているのか、はたして積極的な役割をはたすのかはたさないのか、という疑問にも一定の解答を与えることが求められている。

諸連関の中で媒介されたものとしての知覚、という側面には、知覚作用と事物との接触から発生する対象的意味、その意味の凝結物としての言語や記号と知覚との関係の問題がふくまれる。この点については、人間の知覚のうちに潜んでいる多様な意味を解明する上で大きな寄与をしながら、意味を物神化することによって知覚の本性を歪めてしまっている現代の現象学の諸主張が、この領域でまじめにとりあげられ吟味される必要が出てこよう。そのほかに、知覚の担い手でありながら、それ自身知覚の対象にもなりうる「身体」という実在、その身体と環境的世界との生理的・心理的交流、さらに両者の社会的かつ文化的交流に目がむけられなければならない、これらのことが知覚の成立と知覚の意味内容にとってどれほど根本的な意義をもちえているか、が解明されなければならない。

とはいえ、意味の問題をとりあげ、身体と世界との交流に目をむける場合、なにより注意しなけ

ればならないのは、観想的で情緒主義的な知覚解釈（現代の解釈学者たちにその傾向が強い）に惑わされないことだ。知覚とは、そもそも人間の現実生活に根づいた、しかも個人的または社会的必要から成立する対象認知の行為である。だから、知覚が表現する多面的な意味をば、われわれの生活上の願い、要求、目的、価値意識との結びつきの中でつねにとらえ直さなければならない。生活実践の中から生まれる知覚は再び生活の中へと帰り、たえず実践のうちに織りこまれる。「生活」の観点は、知覚の意味を探究し、知覚の本性を諸連関の中でとらえる時の、欠くことのできない基礎でもある。

2) 以上のような多彩な側面をもっている「知覚」は、もとより多くの経験的科学研究の対象でありうるし、またなければならない。人類の精神形成の一翼をになうものとしての知覚的能力の発達は、第一義的には生物学・進化学の対象となろうし、また言語やその他の文化的諸産物との結びつきが注目される場合には、言語学や文化人類学の一主題としてもとり扱われることができるだろう。

知覚の構造的な理解にさいしては、知覚が身体と対象とのなにかの接触および身体内部の生理的メカニズムの特定の変化・運動である以上、われわれは、まずなによりも生理学、とくに神経生理学や大脳生理学の研究のつみ上げをまつ必要がある。知覚の疾病や障害という分野にまで足をふみいれるならば、医学や精神病理学がもたらす成果をもわれわれは考慮しなければならない。そして人間の知覚は、意識による直接的ではあるが最も基本的な対象認知であり、生理的なものに媒介された人間の心理現象であることによって、いうまでもなく心理学の最も重要な対象であったし、今なおそうでありつづけている。

さらに、各人の知覚のうちにしみこんでいる（ないし同化されている）生活上の要求、環境的世界に対する好き嫌い・是認否認の構え、過去や未来への失望あるいは期待、社会的な価値感覚や道徳的法的規範の影響等々は、知覚の個性的であると同時に社会的な意味を構成するものとして、社会学や社会心理学はいうにおよばず、歴史や文学の研究にとっても重要な研究対象になりうるのではないか。

とすると、知覚に関するあらゆる探究は、経験的諸科学のうちに解消してしまうようにみえる。では、哲学に残された領域ないし独自の課題は存在しないのであろうか。つまり、「知覚の哲学」は、有名無実であるのか、それとも思弁に立脚する越権的な構想だというべきであらうか。

いっさいの経験的科學から独立した、それら科学の実証的成果にまったく依拠しない、知覚の純粹哲学はたしかに虚妄であるにちがいない。「知覚」という事象は、端的にリアルなものではないとしても、リアリティをもった一つの存在様態である以上、それを単に思弁によって構成し思弁によって本質把握をすることは許されないからである。哲学が、さまざまな角度からその分析にたずさわる諸科学の外に立つことによって自らの純粹性を保とうとするなら、その純粹さは無内容を意味するしかない。

しかし、上にあげた経験的諸科学が提供してくれる、数多くの実証的事実の論理的な一般化として

の「知覚の哲学」は、十分成立することが可能だ。

たとえば、われわれは、人類にそなわっている感性や知覚的意識の発達過程を考察する場合、歴史の中に現われるいろいろな偶然的原因や条件、ささいな逸脱や非本質的な変異の現象をとりぞいて、人間的感性や知覚作用の一般的形成史を明るみに出すことができ、そのことによって、他の動物の知覚とは区別される人間的知覚の特色、人間のもつ他の認識能力・心的作用（知性、意志、感情等）とは異なった知覚機能の独自性などをとり出すことができる。それは、いわば「歴史的なもの」の中から浮かび出てくる、その歴史的なものの最も典型的な精華としての「論理的なもの」にはかならない。哲学には、自然と人間の歴史にかかわりながら、このような知覚についての概念的理解を提起することが許されている、いやむしろ、この種の重要な学的使命を積極的にはたすことが要請されている、といてよい。

では、認識作用としての知覚をめぐる分野ではどうであろうか。生理学や心理学のみが覇権をにぎり、それに対して哲学は沈黙したまま退場しなければならないのだろうか。いやじつは、この領域でこそ、困難ではあるが最も重要な任務が哲学に課されているはずだ。

生理学は、知覚という一見心理的な作用の基礎に、どういう生理的メカニズムが働いているか、よりくわしくは、感覚的受容器、神経伝導路、大脳中枢のうちにもどのような物理的・化学的・生理的变化が生じているか、さらに、物理的刺激によって生理的变化をこうむる受容器や伝導路と、その変化にもとづいておそらく瞬時的に統制と指示をおこなう大脳中枢との間には、恒常的にどのような有機的連関が形成されうるか、をわれわれに教えてくれる。

心理学では、身体の生理的メカニズムを一応捨象して、現に成立している人間的知覚そのものの諸特性が明らかにされる。要素主義的な精神物理学の立場に身をおくか、いわゆる「全体」を重視するゲシュタルト派に立脚するかによって、知覚現象の理解に著しい差異が生じることは否定しがたいにしても、刺激の変化にともなう知覚の変容、知覚の恒常性や錯覚、知覚の体制化などのテーマにみられる、知覚の諸特性やこれらの特性のうちに表現される一定の法則性の実証的探究は、他の経験科学には手の届かない心理学の独壇場というべきであろう。

また、知覚心理学によるこのような知覚の構造的な研究と並行して、いわゆる発達心理学の中では、乳幼児から少年・大人へと成長していく過程での対象知覚の発達が探究され、それによって、人間の知覚がいったいどの程度生得的であり、また後天的であるのか、という生得・獲得論争への理論的寄与がおこなわれることを、われわれは期待してよい。

哲学は、まさにこうした生理学や心理学の提出する新しい諸事実を受容しながら、哲学史上の伝統的な根本問題である、物質と意識、主観と客観、心理的なものとの生理的なものとの関係を、より一般的にとらえ直すことを求められる。諸科学の経験的事実は、物質と意識、心理と生理という二項関係を解体するものではなく、これら二項の新しい関係の高度な概念的把握を要求するものなのである。

そしてもちろん、哲学は以前と同様に、いやそれ以上に、自らに固有な「認識論」領域の中で、

知覚とはそもそも対象のどのような側面・どのような範囲の反映なのであるか、対象の本質への認識途上でそれは表象や概念とどう関係しどのような役割をはたすのか、知覚は総じてどれほどの確実性・普遍妥当性を与えることができるか、という、伝統的に最も困難な課題でありつづけてきた、いわゆる知覚の真理問題に論及することを強いられているのである。

この種の問題に解答を与えようとするさい、われわれは、生理学や心理学の経験的事実を集めて無原則に組み合わせたり、これら個別科学の中で通用しているカテゴリーをそのまま使用するだけでは、目的を達しえないだろう。認識論に特有の諸カテゴリー、たとえば、主観や客観、感性や知性、反映や観念的再生産、確実性や真理、という普遍性をもった基本概念を活用したそれらに導かれながら、知覚現象を分析し、その概念的な把握を試みる必要がある。哲学的カテゴリーはそのための方法的武器である。

こういう主張に対しては、知覚はわれわれの直接的な経験であり、それ以上さかのぼれない端的な事実であって、分析や説明の対象、まして概念的な把握の対象にはなりえない、という考え方もあるかもしれない。だがよく考えれば、それもすでに一つの前提をもつ知覚観——知覚の発生の根拠や生成の歴史を不問に付そうとする立場——であって、はたしてそういう前提が正しいかどうか当然吟味されなければならない。

とはいえ、先にあげた知覚の真理問題にかかわるテーマは、知覚の生理学的・心理学的説明だけでは片づかないものであり、またこれまでこの種の説明をひじょうに重視してきた唯物論哲学の認識論が、それほど熱心にはとりこんでこなかった課題でもある¹⁾。経験論、カント学派、現象学などのかかげる認識論がじつに微に入り細をうがって自説を展開しながら、いぜんとしてその主観主義の制約のために正しい答を出しきれていない一方で、唯物論の側でも、これら思想潮流の銜学性を嘲笑したり、それらの立脚点の根本的な誤謬つまり観念論的性格を指摘するのに急で、この領域での哲学的成果をつみ上げる点では不十分であった。

たとえば、心身問題などで、理論上唯物論に近い立場をとりながら、自説を唯物論ではないと称するある哲学者が、次のような趣旨の表面上「正当な」批判を投げかけている。すなわち、唯物論の見地では、知覚的意識が或る発展段階にある物質的過程の結果として生じた特殊な現象にすぎず、かくて当の意識現象の中でしかものを考えることのできないわれわれは、実在の真の姿を知りえないことになる、と²⁾。

ここには、明らかに存在論レベルと認識論レベルとの混同にもとづく唯物論学説への誤解がある。だが、われわれがそれ以上に注目すべきは、この種の主張の中に、唯物論的知覚論についての予想

1) もちろん、知覚論に限定せず、認識論一般についていえば、すぐれた唯物論的著作は数多い。その点を無視することは公正とはいえない。現代では、戸坂潤『認識論とはなにか』、コプニン『認識論』、岩崎允胤・宮原将平『科学的認識の理論』などが、哲学的唯物論にとって貴重な理論上の共有財産となっている。

2) 『「心—身」の問題』(産業図書)中の山本信論文参照。

以上に広がっている無理解と、またこの無理解を払拭しえていない唯物論的知覚論の未成熟が表現されているということだろう。

素朴实在論でもなく、そして生理学的あるいは機械的唯物論でもない高次の哲学的唯物論からする「知覚の哲学」がいまこそ求められているのではないか。この哲学の精密化と体系化は、唯物論を支持する多くの哲学者や科学者の協力・共同を必要とするだろう。ここでの私の論述は、そうした共同作業を促すための一つの試みである。

その第一歩として、知覚の構造の哲学的分析からまず論をすすめてみよう。

II. 知覚の構造

1) 知覚は、われわれが高い注意力をもって意識的に或るものに向っている場合であれ、とくに認識しようという意図をもたずに漠然と或るものに向っている場合であれ、一定の対象についてのかなり直接的な認知であることは疑いない。この経験の直接性のゆえに、主客未分の最も根源的な経験だといわれる傾向があるが、しかし、そのことは、知覚という事象が、対象と知覚する主体とのどういう交流の結果であり、また何が知覚を構成する諸要素であり、これらの要素が互いにどのように関連しあひまた統合されているか、を問うて知覚の分析や説明にたずさわることを、けっして妨げる理由にはならない。

知覚が直接的に明証的な事実であって、この事実の根拠にさかのぼることは不合理であり、知覚現象をそれが与えられるがままに単に記述していかなければならないのなら、知覚の構造を問うことは無意味であり、むしろ知覚には構造がないといえる。だが、知覚が端的な事実である前に、われわれ人間のある対象へのかかわりの一定の結果または産物であること、つまり、直接的なものに見える知覚そのものもじつは媒介された事実であることを承認するならば、異質なものの間でとり結ばれる関係や媒介様式が知覚のうちに反映されるはずである。そのとき、知覚にはなんらかの構造が存在しうるし、知覚の構造を問うこともできる。従って、私がここであえて「知覚の構造」をいうからには、すでにそこに、端的な知覚から出発するのではなく、知覚の成立の条件や根拠を明らかにしようとする分析的態度があることを知っていただけよう。

では、いったいどういう構造なのか。

たとえば、いま私は眼前の一つの湯呑茶わんにあい対しているとしよう。それは、テーブル上のある場所におかれ、その大きさによってささやかな空間を占めている。ボールほど丸くはないが、コップほど円筒形でもないような一定の円みがあった形をしている。表面はうす茶色で、ある種の光沢をもっている。手を伸ばして湯呑に触れてみれば、冷ややかで滑らかな感触がある。つかんで持ち上げてみれば、庭にある小石と同じくらいの（計量すれば約100グラムの）重さを感じる。指の爪先でたたいてみれば、風鈴とよく似たかすかな音色がする。鼻を近づけてみれば、湯呑にしみついた茶のにおいがするし、お茶をのむ時に湯呑の端に舌でも触れようものなら、やはり渋い茶の

味を感じることもあるだろう。

このように目の前にある湯呑茶わんは、私の諸感官を触発し、大きさ・形・色・重さ・感触・音・におい・味等々を感覚させる対象である。この湯呑についての知覚は少なくとも、これらの感覚の集合であることはまちがいない。しかも、これらの感覚は、この湯呑自体がもっている性質であるかどうかはともかく、明らかに、知覚される湯呑と知覚する私とのある種の交流の結果であることも疑いえない。私は湯呑に対して時には遠くから時には近づいて（または接触して）観察し、その諸性質をつかんだのである。私が湯呑であり湯呑が私であると言うのでないかぎり、あるいは、私と湯呑との間にどんな区別も立てるべきではないと言わないかぎり、そこでは二つのものの間に直接的なかつ間接的な交流が存在したのだ。

この交流は、はたして物質的なリアルなものであるか、観念的なイデアールなものであるか、それとも、両者の混淆ないし融合であるのか。いまこの箇所では、即座にその答を出すことは難しい。知覚成立の諸条件を究明していくこれからの叙述の全体を通してはじめて、それに的確に答えることができるだろう。

では、湯呑茶わんをさまざまな性質をもつ一つのまとまった対象だと知覚する主体は何なのか。形や色、温度や滑らかさ、音・におい・味などの諸性質は、いうまでもなく目・皮膚・耳・鼻・舌などの感覚器官、また、それらにそなわっている特殊な受容器を通して認知される。ところが、感官なくして感覚はえられないとしても、感官だけでは個々の感覚すら生じえない。なぜなら、感官が神経回路を通じて大脳中枢に結びついており、大脳の統制や指示のもとにはじめて人間の感官も機能しうることは、明白な生理学的事実だからである。

対象を知覚するさいに、諸感官・神経系・大脳中枢が瞬時に機能することは想像にかたくない。大脳中枢が人体の頭部（頭蓋骨の内部）にあることは確かだとしても、じつに身体のあらゆる部分に感官や神経系が広がっており、それらが共同して一つのあるいは種々の対象を直接的に認知していることを考えれば、知覚の主体は「身体」だというほかはない。

カントをはじめ、人間の認識能力の研究にたずさわってきたこれまでの多くの哲学者たちにとっては、知覚する主体は身体であるよりもむしろ「意識」であった。身体は因果の自然法則に支配される物体であり、身体の各所に存在する感覚器官も本質的に受容性しかもたないものと考えられていたことが、知覚し認識する主体としては身体が排除された大きな原因であった。しかし、彼らが知覚を問題にしたとき、身体ときりはなされた意識のみが働いて、身体がなんらの役割もはたさない、と考えていたわけではない。こと対象認識を主要なテーマにする場合には、ただ人間身体の意識的側面ないし能動的作用をとくに「意識」として浮かび上がらせる必要があったのだと思われる。

その意味では、知覚する主体が身体だといっても、知覚の成立している場面では、それ自身、その全体がいわば「知覚的意識」に変貌している身体が当の主体だと理解すべきであろう。認識主観ないし意識機能として対象にたち向っている身体、これが知覚の主体であり、一般的に対象認識の主体なのである。最近、従来の認識論では認識主体をもっぱら意識に帰してきたことが、非難の的

になっているけれども、そのことによって、近代認識論の諸主張が上述のように対象認識における意識の意義を明確にとらえていたという積極面を、忘却してはならないのではないか。

2) さきに私は、身体にそなわっている諸感官・神経回路・大脳中枢が瞬時に共同して働くことによって、ある対象の知覚が可能になる、と述べた。これは、知覚といういわば心的能動的作用には必ずなんらかの物理的生理的過程が基礎にあることを意味している。だがじつは、「基礎にある」という表現は多くの難問をよびおこす。ある物理的刺激が身体に加えられそれに規定されて生理的变化が生じ、その結果対象知覚が発生するというように、原因—結果の連鎖で知覚そのものを説明することができるか、また説明してよいのか。物理的刺激や生理的变化は、本質的に存在様式のちがう人間の意識作用に対して、ある原因となって影響を及ぼすことができるのかどうか。

ここには、デカルト以来連綿とつづいてきた伝統的な心身問題が姿を現わす。知覚の哲学もこの難関を避けて通ることはできない。だが、この根本問題の解明には、なにより現代生理学の諸成果に依拠することが必要だろう。生理学的事実をふまえた本格的な心身関係論については章を改めて叙述することにして、さしあたりここでは、後論のために必要な範囲での、心身問題をめぐる私の基本的な見地を呈示しておこう。

結論的に言えば、知覚という事象を、物理的刺激→生理的变化→知覚の発生という、原因—結果の連鎖で理解することは困難である。物理的なものと生理的なもの、生理的なものと心理的なものとの関係は、自然的な事物の間に生じている原因と結果の一方向的な関係だけでは汲みつくせない内容をもっている。もちろん、自然界といえども、諸事物相互による網の目のような無数のつながりによって、いわゆる「普遍的な交互作用」の世界になってはいる。しかし、無機的な事物の「交互作用」も、まだ十全には機械的な運動のレベルを脱してはいない。物理—生理、生理—心理の関係をとらえるには、有機体のもつ固有の存在論理や、意識ないし精神活動の創造的な諸特質を考慮しなければならず、因果性や交互作用より高次の論理（ヘーゲル的には「概念」の論理）が探究され提起されなければならない。

事実、生理的なものは、物理的刺激を与えられるがままに受けいれるだけではなく、それを取捨選択したり、変容したりすることもでき、原因と見えるものも、時には反応の一つのきっかけ（機会因）にすぎなかったり、生理的なもののうちに潜んでいるもっと根本的な原因とならぶ、あるいはそれより低次の一つの条件にすぎないこともありうるのである。また、あとでくわしく論ずることになるが、感官の機能にはすでにかなりすすんだ能動的な対象認知がみとめられる。ある色を赤いとか白いと感覚すること自体、単なる刺激の受容ではなく、身体の自律的な感覚機能を前提しないでは理解しえない現象である。

さらに、物理→生理→心理という一見もっともらしいプロセスを、いわば時間的な経過として、つまり先後の関係で理解することも正しいとはいえない。

たしかに、われわれの日常経験の中から、物理的な刺激が生理的な変化に、生理的な変化が心理

的なものの発生に先立っている、と思わせる事例もいくつかあげることができる。たとえば、暗い室内に入って、入口の電気スイッチをつけ、一度に室内が明るくなった場合を考えてみよう。電灯の発する光がわれわれの目を刺激し、室内におかれていたテーブルやいすの存在をわれわれは一瞬にして知覚する。この場合、電気の光という物理的刺激が先に存在し、ひじょうに短い間隔であったにせよ、一定の時間的経過をへてテーブルやいすの知覚が現われたことはまちがいないようにみえる。

また別の例をあげれば、ある時、遠くからひびいてくるなにかの音を聞いているとしよう。初めそれが何の音であるか、何が叩かれているのか理解できず、そのうち耳をすまして二度三度聞いてみて、やっと寺の鐘だと認知できる場合がある。この場合、聴覚器官の対象である特定の音を鐘の音だと知覚する前に、われわれは耳にまで達した空気振動によっていくども刺激されたはずであり、この刺激と知覚との間には一定の時間的経過が存在したことは疑いえないようにみえる。

私は、さまざまな性質をもつ事物を、一つのまとまった対象として知覚するには、一定の時間的経過が心要であることを認める。未知の事物が対象となる場合にはとくにそうである。知覚は諸感覚の総合であり、この総合を一挙になしえないわれわれの認識能力にとって、時間的な猶予が必要であることも多いからである。

にもかかわらず、明るい室内でテーブルやいすを見た時、これらの事物の視覚と光の物理的刺激とは同時であったと私は主張する。たしかにテーブルが、部屋の配置上、他の家具や備品にかくれて部分的にしか見えず、室内を少し歩き回ってその全体の姿を確認し、やっと一つのテーブルとして知覚することはありうる。だが、テーブルだと確認できないまでも、このテーブルに眼ざしを向けてその部分的な形や色などを感覚した時点は、テーブルと目の間に介在する電気の光が働いている時点と同じである。人間の目は、光の刺激と同時に、目の前にある特定の事物をそこにあるものとして見ているのである¹⁾。ここでは、光が先か視覚(「見え」)が先かは問題にならない。

鐘の音の場合も同様である。不明瞭な音響を、ほかならぬ「鐘」の音だと理解するまでには、いくどか聞き直すことによってそれなりの時間の流れは存在しよう。しかし、聞こえてくるひびきをなにかの音として感覚した時には、空気振動と聴覚(「聞こえ」)との間に先と後との区別は存在しない。

「何かを感覚した」という時にはすでに、身体レベルで感官・神経系・中枢の有機的な共同作業が一挙におこなわれたのである。こうしてわれわれは、光線を見るのではなく、手の届きそうな近くにテーブルを見るのであり、空気振動を聞いているのではなく、遠くの鐘の音を聞いているのである。

1) われわれの目が、事物を「そこにあるものとして見る」ことができるということは、少しふりかえってみれば、一つの「神秘」である。自分が見ようと思う数メートル前方にある物に焦点を合わせて、他のものでなくまさしくそのものを知覚しようということは、説明しがたい高度な目の能力の証しである。この能力は、生物史・動物史などの進化の歴史の中で結実したものにはちがいない。

ところが、一般的には、光や空気振動という物理的刺激がわれわれの感覚受容器に作用し（刺激もいわば生理的なものに変化し）、つづいてその生理的な刺激が受容器から神経伝導路に伝えられ、ついには大脳にまで到達してその結果知覚像が完成する、と考えられやすい。こういう考えにあつては、物理的刺激が受容器に作用した時点ですでに不十分ながら知覚像が成立し、刺激の伝達がすすむに従ってより明確で完全なものに成長していく、あるいは修正されていくというように、知覚の形成過程が説明されることになる。ことに人間の目がカメラのレンズにたとえられ、網膜に対象の倒立像がつくられる、という通俗的な理解がこの説明への信頼感をいっそう強化している。

この種の説明では、刺激の伝導がどんなにすばやくおこなわれようと、必ず一定の時間的な経過が想定されている。したがって、知覚の全体を理解しようとするれば、われわれは、形成途上にある対象の知覚像を時間の流れにそって、人間の身体内部に追い求めてゆかなければならない。しかし、知覚像（正確には知覚）は、生理的な実在ではなく、生理的な変化にともなういわば心理現象にほかならない。それゆえ、知覚像が、受容器や神経繊維はもとより大脳の中にさえ、姿形をもつ「あるもの」として成立しているはずはないのである。知覚している当のわれわれ自身も、たとえ自分の脳髓を解剖し観察できたところで、そのどこにも知覚像の存在を確認することなどできはしないだろう。

3) 以上のように、知覚の成立に関して、物理・生理・心理の諸関係を原因—結果や時間的な経過において理解し説明しようとする、深刻な矛盾に陥らざるをえないことをわれわれは知ることができる。したがって、「知覚」ということに表現される事物と身体との関係が自然的な因果関係でないことは、十分確認されてよい。しかしだからといって、それが、純粹に観念的な関係であるとか、事物をすべて単なる機会因とする、意識の力だけの心理的創造活動であるということには決してならない。

知覚は、単なる物理的刺激だけでも、単なる生理的な変化だけでも、まして単なる内的心理の変容だけでも起りえないことはたしかだ。知覚の成立のうちには、物理的過程・生理的過程・心理的過程がわかちがたく集中的に表現されているとみなければならぬ。陰影や濃淡を生む光がなく、その光をまぶしいと感ずる目がなければ、視の感覚はありえない。音源から発して伝播する空気振動がなく、その振動を時には不愉快な雑音として時には美しいメロディーとして聞く耳がなければ、聴の感覚はありえない。物理的過程や生理的過程は、知覚の原因ではないが、それらなくして知覚もありえないという意味で、知覚成立の根本条件ではある。

私が先に、物理的生理的過程が「基礎にある」と言ったのはこの意味においてである。それらを知覚の「原因」としてはうけいれがたいにしても、「可能性の条件」（カント的な言い方だが）としては認めなければならない。「知覚一元論」者は、物理的生理的なものを知覚の原因としては斥けうることをもって、ただちに、物理的なもの・生理的なものなしの知覚現象へ移ることができると思ひこんでいる。だが、そんな妄想は、実際には食事の時おいしいビーフステーキを食べながら、

当のステーキやそれを味わっている口や舌の働きについては完全に無視して、おいしい味だけがひとり存在している、と言うのと同じであろう。

もっとも、マッハに代表される知覚一元論では、ここでいうピフテキも、ある形・色・におい・味というような諸感覚の束であり、口や舌もわれわれによって見られたり触れられたりする身体の一部だから同じように感覚の束だということになって、結局すべてが背後に物質的なものをもたない感覚的所与に還元されてしまうことを私は知っている。ピフテキも、口や舌も、「おいしい味」も、すべて感覚・知覚の地平の中におしこめられるわけだから、それらの実在性にはどんな区別もない。こういう議論に対しては、信仰にのみ生きる人々の主張に対してと同様、対話の不毛性を悟って、私はもはや口を閉ざすことしかできない。

ここで、私は、知覚の成立根拠をめぐるこれまでの特徴的な哲学上の議論に少しふれておきたいと思う。

知覚や認識の研究にたずさわった講壇的な哲学者の多くが、われわれの身体の外部に物質的事物の存在を想定することを独断的だとみなし、知覚の根拠としてそれらを認めないという不当な主張をくり返してきた。こうしたアカデミズムの雰囲気の中で、ヒュームは、「印象」が人間の感官を打って、寒熱や快苦などの諸知覚が生じると言っているし、また「物」がわれわれの心をなんらかのしかたで触発することによって感覚が生じる、と説明したのはカントである。

ヒュームでは、「印象」から出発することによって、客観的事物はそもそも認識問題の中に入っていないように工夫されており、他方、単なる主観主義にはとどまらなかったカントでも、物自体ではなく「現象としての物」が強調されることによって、知覚の成立にとっての物理的・化学的な実在の意義は、それ以上究明されていない。20世紀の現象学者フッサールにあっても、感性的な知覚は端的な知覚であり——われわれが外的事物に視線を向けるやいなや、その外的事物が一挙にわれわれに現出する——、この端的な性質にとっては、基づける作用や基づけられる作用というような機構は不必要だ、と言われる。こうして彼は、知覚が端的であることを理由にして、知覚にたいする客観的な事物や過程の規定的意義を問うことに反対するのである。

哲学は、ことに認識論は、その確実性が吟味され認められていない自然的物的事物の存在や諸作用から出発すべきではなく、われわれの現に与えられている感性的経験から出発すべきだ、といわれる。この種の主張のうちに秘かに隠されている、われわれの個人的な体験こそ無条件に確実だ、という立論には大いに問題があるにしても、それがたしかにより直接的で明証的であるという点で、私は認識論の出発点を外的事物ではなく、まず「経験」にもとめることに同意する。とはいえ、感覚や知覚が端的にある事実だとしても、この事実の発生理由つまり感覚や知覚の存在の根拠を問うことはなんら非哲学的ではない。感覚や知覚の「基礎にある」外的事物の物理的作用や身体の生理的機能に注目することが認識論としての哲学の課題をこえていると言うなら、それ自身がそもそも一つの哲学的態度の表明ではないか。

知覚の「端的であること」ないし無根拠という性格を看取するのは、当の知覚ではなくて、知覚

を外的に反省する人間の知的な作用であり、思考にもとづく判断であろう。知覚の構造を分析することによって、物理的なものや生理的なものの規定的性格を見出すのも、同じように知的思考の働きである。知覚自身は、自らの生成過程をふりかえらないし、自らの存在根拠を探究しない。

狭義の認識論が、感性や知性（悟性・理性等）などの人間の認識能力の分析、知覚や思考による対象認識の範囲や妥当性についての体系的叙述をめざすものであるとすれば、現に成立している知覚の根拠を問ひ、その根本的条件としての物理的なもの・生理的なものの規定性を指摘しそれらの規定様式を究明することは、当然認識論の任務の一つでありうる。逆に「内在主義」に固執して、あくまで知覚の根拠への問いを無視しつづけるならば、それは自らの足場を動揺させまいとする観念論的認識論の自己保身策だと言われてもしかたがあるまい。

4) 私はこれまで「感覚や知覚」とか「感覚の総合としての知覚」というぐあいに、両者を並列したり、部分と全体のような関係として言い表わしてきた。これは、議論をあまりに複雑にしないための暫定的な措置であったのだが、しかし、「知覚の構造」というテーマに正しく接近するためには、感覚と知覚との間にいまや一定の質的区別をみとめる必要があると私は考える。

これまでの叙述からもある程度察していただけるように、私は「感覚」（さしあたり外的感覚）を、身体（とくに感覚器官）と或る外的事物（およびその事物の物理的・化学的運動や結果）との、かなり直接的で一時的で部分的な接触の産物である、と理解する。目の前のごく狭い表面に広がる淡い赤色、瞬時的に耳にひびいてくる高い叫び、舌に鋭くつきささるような或る辛さ等、それらが環境の中でどんな事物や人間によって担われているかがわからなくとも、それぞれ個別的な感覚としてわれわれにまず与えられる。こうしたさまざまの感覚は、直接的かつ個別的であることによって、比較的無構造だということができる。

これに対して、私は「知覚」を、これらの感覚をある対象の諸性質としてつかみ、対象を一つのまとまりある全体として直観するしかただと理解する。先にあげた湯呑茶わんの例を再びとれば、表面のうす茶色、円みがあった大きさ、滑らかな感触等々が、まさにこの湯呑茶わんの諸性質としてつかまれた時¹⁾、逆に、これらの感覚の担い手として湯呑茶わんが一つの全体としてたち現われた時、われわれは湯呑茶わんを知覚したのである。

知覚においては、少し論理的な言い方をすると、多くの個別的な諸感覚だけではなく、明らかに、それらの統合ないしは一定のつながりとしての「普遍性」が出現している。この湯呑茶わんは、色・大きさ・感触・光沢・においなどの「多く」の感覚的諸性質を自らのうちに結びつけつつ併存させる全体であり、自分しかもたぬこれらの性質によって、別の諸性質をもっている他の湯呑やコップなどとは区別される（あるいはそれらの他者を排斥する）「一（者）」としてのまとまりを獲得している。「一」ではあるが、この「一」のうちにこそ湯呑茶わん独特の普遍性が表現される。こうしてたしかに、知覚の対象は、ヘーゲルが言う通り、「多」と「一」との論理的関係をもっているのである²⁾。

私は、直接的でごく部分的な認知を「感覚」と呼び、ある一定のまとまりをもつ対象の直観を「知覚」と呼んで、両者を一応区別した。しかし、次のような反論の出ることが当然予想される。

われわれのまわりの諸事物の中には、一挙に知覚できないような巨大なものがたくさん存在している。ところが、上の区別によれば、それらの大きな対象の一部や諸側面についての直観は、すでに知覚といってよい段階であるにもかかわらず、その対象全体が何であるかが判然としないという理由で、いつまでも構造をもたぬ部分的な感覚と呼ばれることになるのではないかと。この異議はまったく正しい。

われわれが、巨大なビルディングの前に立っているとしよう。それがビルディングだとはわからないまま、その建物の一階の白い壁を見、ガラス窓を見ている時、壁や窓についての直観は、いうまでもなく感覚というよりはすでに知覚である。なぜなら、諸性質の総体としての、つまり或る対象としての壁や窓が直観されているからである。それゆえ、知覚とはまとまりをもつ対象の認知であるから、空間的に大きな（あるいは時間的に長い）対象をそれとして（この場合はビルディングをビルディングとして）判明に理解するまでは、その途上の認知を知覚と呼ぶべきではないとあえて言い張るなら、それは、形式的な定義にだけこだわって知覚の本性を歪めることになるだろう。感覚的個別性をこえた普遍性が出現している時、すでに知覚が成立しているとみなすべきだからである。

とすると、こういう洞察は、感覚がいつまでも感覚でありつづけ、感覚と知覚との間には必ず固定した区別が存在している、という見解をゆさぶり、その修正を迫ることにもなる。ことは巨大なものにかぎらない。われわれの身近にあるささやかな事物においても起りうる。それはどういうことか。

たとえば、いま私の目には、机の上にある一冊の本の表紙の赤色が見える（やや厳密に言えば、ふつうの自然光および正常な色覚をもつ目という条件のもとで）。最初ふと目にとびこんできたその色は、それがほかならぬこの本の上に広がっている赤であるとか、よく見れば平均的な赤というよりは橙色のまじった赤であるとかいう、よりすすんだ認知あるいは反省をふくんだ感覚ではなく、反省を欠いたごく直接的な感覚であるにすぎない。だが、継続的に注意力をはたらかせて、あるいは他のものとの連関を顧慮しながら注視する同じ赤は、すでに最初の瞬時的な赤の感覚を越え出ている。いま見ている「この」赤が、表紙の地になっていると気づかれている場合には、それは、当

-
- 1) もとより厳密に言えば、湯呑茶碗自体は、うす茶色そのもの、滑らかさそのもの等をもっているわけではなく、人間の感官にそのような色として感触として感覚されうる一定の實在的な性質をそなえている事物にはかならない。もっとも、これは素朴實在論という非難を避けるための、やや蛇足的な説明であるが。
 - 2) 知覚内論理としての「一」と「多」は、前者が普遍性を後者が個別性を代表することによって論理的に対立するが、同時に、同じ場で両立しつつ、一方が他方の不可欠の存立条件となる点で、いわゆる「相関的対立」の関係をなしている。それゆえ、ヘーゲルがこの関係を「矛盾」ととらえたことは正しくない。二項が同時に同じ場で相互排斥的であるような関係こそ、矛盾と呼ばれるべきだからである。

の色がある事物の感覚的な一性質としてつかまれているわけだ。橙色に近い赤色であると感覚されているならば、それは、かぎりなく多くの彩度と明度をもつ赤という色系列の中の一様相として理解されているわけだ。この赤は、直接的で個別的な所与の性格を脱して、他のものとの連関の中へ、普遍性のうちに一定の位置を占める個別性へと移されているのである¹⁾。

だから、私に言わせれば、諸連関の中にある赤、普遍性に支えられている赤は、すでに感覚ではない。これは知覚と呼ぶことができ、また呼ばなければならない。このように感覚はたえず知覚へ移行し、最初の単なる直接性・個別性を失う。あるいは、各感覚（さまざまな感覚的与件）は、知覚のふくむ内的連関の中につねにくり返し組みこまれ、他の感覚とは違うある個性をもった感覚として、対象に固有の一性質を表示する感覚として成長し、こうして自らのうちに一定の意味をそなえた知覚へと進展する。

このように、感覚と知覚との関係は、意図的な対象認識のプロセスにあっては、基本的には前者から後者への移行の関係として理解されなければならない。ただし、私はあえて「対象認識のプロセスでは」と言う。というのも、われわれの日常の経験を少しふりかえてみると、感覚から知覚への移行は、あらゆる場合に例外なく必然的だとはいえないからである。

われわれのうちには、無数のさまざまな感覚が不断に生まれているが、それらの大部分は、どんな事物に由来しているのか、どんな意味をもっているのかがまったく気づかれないうちに、消え去っていく。多くの感覚は、たしかに存在したが、知覚の資格をうるにいたらないうちに解体する。この場合、感覚はいつまでも感覚にとどまりはしない。生まれるとただちにそれは変容しあるいは衰微する。印象の強さによって、主観の注意力によって維持され継続する感覚だけが、知覚へと上昇するのである。

他方、特定の対象の認識過程でも、この感覚から知覚への移行が無条件に必然的だとか、あらゆる感覚が解体せずに知覚へと生成する、というわけではない。しかし、この過程では、ひとたび与えられた諸感覚をたえず選択し維持し統合することが、それほど自覚的ではない日常経験に比べて、はるかに意識的に遂行されている。対象についてのより全面的で正確な知覚という認識目的が、つねにこの移行の推進力となって主観を導くからである。

5) 感覚は生まれ、存在するが、あるものは衰微し、あるものは知覚へ移行する、という私の主張は、これまでに提出されたいくつかの感覚論や知覚論にたいする有効な批判的視点を与えてくれるように思う。一つは、イギリス経験論の中で唱えられた「観念連合」論に対してである。

この理論では、直接的な生きいきした印象と心の中に残る淡い映像たる観念とが区別されているが、いずれもさしあたり、われわれのいう「感覚」（後者は、より正確には「感覚表象」とみなし

1) 実はここに、物と性質（ないし実体と属性）や普遍と個別というカテゴリー関係の萌芽を見てとることができる。もちろん知覚的意識は、主として直観の能力であって、諸連関を概念的・言語的に理解しているわけではないが、それ自身すでに関係の意識でもある。

てさしつかえない。単純印象には単純観念が対応し、単純観念を連結することによって複雑観念がつくられる。想像機能をもつ心は自由にこの連結をなすこともできるが、またわれわれの日常習慣から形成された「類似」や「接近」「原因と結果」という諸原理がおだやかな作用力としてはたらし、一観念の出現につれて自然に他の観念を導出する、というのである。

ここでは、単純観念という要素的な感覚(表象)は、印象ほど生彩がないとしても、最初に生れた時から何の変更もうけず、もとの質や形を保ったまま、想像機能や連合原理(じつは習慣)に従って連結されたり分離されたりするのである。だが、私がすでに見たように、印象と呼ぼうと観念と呼ぼうと、感覚は初めどんなに単純で要素的な性格をもっていたとしても、それはたえず諸媒介の中へ投げこまれ、もとのままの直接性や個別性を維持しえなくなる¹⁾。感覚は、他の感覚との結合や知覚への編入によって、新しい意味を獲得し、最初の質や形をも変貌させるからである。

さて、もう一つは、純粹感覚などは本来存在せず、われわれは、まずもって物を意味のある一つの全体として知覚するのだ、というメルロ=ポンティ流の現象学的知覚論に対してである。

なるほどメルロ=ポンティの言うように(もっとも、彼の使用する「意味」概念はひじょうに多義的で、その説明も不親切だが)、人間の知覚のうちには、環境世界との交流の中で発生するさまざまな「意味」(行為の意図、要求、美的センス、価値観など)が浸透し、また表現されている。だが、知覚によって一つの対象全体が意味あるものとしてとらえられるとはいえず、だからといって当の知覚そのものが、自らの生成の地盤を、いわゆる事物との直接的な接触の産物たる「感覚」のうちにおかないですむわけでは決してない。

彼は、純粹感覚が知覚作用を反省する科学的認識の最終結果として出てくるものにすぎず、それは精神によって構成されたもの、一つの錯覚であり欺瞞的なものだ、ときめつけた。こうして、経験論からする要素主義的知覚論——とくにその恒常的な要素感覚の説——を批判するとともに、知覚の生誕の源たる感覚をも完全に追放してしまうのである。もっとも、このことによって、彼の知覚は外的事物との接触をもたなくてよいことになり、ゲシュタルト心理学のうちに残っていた自然主義的傾向と手を切って現象主義的知覚論を徹底させる、という「利点」を彼は手にいれることができたのであるが。

「恒常性仮説」——この説は刺激と要素的感覚とが一対一に対応し恒常的に連結されていると考える——に対するメルロ=ポンティの批判は、その多くがたしかに正鵠を射ており、彼が要素的感覚に代えて意味をおびた全体的知覚を提唱したことも正しい。しかし、純粹な点的な感覚要素を想定することが一つの仮構だとしても、「感覚」概念自体が無意味になったとはいえない。彼によれば、

-
- 1) 連合理論や現代の精神物理学のように、対象認識の過程で不変の感覚要素を終始残しつづけようとすることは、感覚的なものに対する知性的分析・加工・抽象、それにもとづく総合・概括の作業を拒絶する傾向を生みやすい。じっさい、要素主義的知覚論は、複雑観念も習慣に従った単純観念の集合の結果だとする主張と手をたずさえて、人間の精神の抽象化・概念化作用を無視し、抽象的一般的概念の存在を否定してしまったのである。

要素的と見える感覚も、ある布置の中で、全体との関連においてすでに意味をもつ全体であるから、「感覚」概念は不要で、「知覚」概念で十分だ、ということになるが、はたしてそうであろうか。

われわれの身体は、たしかに一つの刺激に対して一つの感覚を生ずる、というような機械的な対応をしているわけではない。だが、環境との接触の中で、日常不断にじつに多種多様の個別的な感覚を生み出している。その圧倒的多くが、改めて注意もされず喚起もされないで消え去っていく。瞬時的で直接的な感覚は、そのほとんどがメルロ=ポンティの言う「意味」さえ示もしない。にもかかわらず、それは、人間経験の原初的ではあるが、きわめてたいせつな対象との交流の第一歩だ。これが維持され注意され時には反省されて、それ自身意味をおびた知覚へと生成するか、または、たえず対象知覚の中に組み入れられながら、知覚のリアリティの基礎となる。感覚をそれ以上分割できない不変の単位としてとらえ、知覚をそれらの機械的集合だと理解した、要素主義には非があるにしても、全体的な「意味」を形成できていない個別性や直接性こそ感覚の特性であって、要素主義的知覚論は、感覚のこの側面を、物理的刺激と無媒介に対応させていわば純粹培養したものに他ならない、ともいいうる。(あえてつけ加えると、生理学上の要素主義には、感覚の中で表現される、身体感官と外的世界とのたえまない密接な対応の関係をゆるがせにしない、まだしも誠実な態度がある。)

その意味では、要素主義の先の誤謬より、要素感覚を斥けることによって感覚の直接性を否認し、感覚の直接性を否定することによって感覚のうちに表わされた外的世界との接触を否認し、かくして外的世界という観念は虚構であって知覚という前客観的領域にふみとどまるべきだ、と主張したメルロ=ポンティの現象主義の誤謬の方が、はるかに罪が重いといえるだろう。

6) 知覚における感覚の意義を論じているこの箇所ですら最後に、私は、これまで少なからぬ哲学者によって提出されてきた「受動的で無力な感覚の多様(性)」という考えをとりあげ、それに批判を加えておく必要を感じる。

カントが、一般に人間の経験(知覚をふくめて)の成立を、純粹悟性たる超越論的統覚が感性的直観の多様をカテゴリーに従って総合統一する点に求めたことは、よく知られている。総合し統一するという能動的な機能は、統覚だけに認められ、その反面、直接的な感覚(所与)や感性的表象などは、いわばカオス的な質料として他からの総合や統一の作用をうけいれる、単に受動的な存在だとみなされた。

カントでは、経験の成立は経験の対象の成立でもある。なぜなら、それだけではなんの規定性ももっていない雑多な感性的質料が、総合的に統一する統覚に先天的に規定されてはじめて、一つのまとまりある「われわれにとっての客観」に値するものとなるからである。だがこの場合、無規定な感性的多様は、認識対象のどういう側面をどの程度代表しているのかあるいは反映しているのかは、まったく判然としなない。感覚器官が外的な物によってなんらかの仕方で触発されて生じたはずの諸感覚は、一応空間という直観形式と結びつくとはいえ、統覚の規定作用によってのみ客観へと

構成されるのであれば、そもそもそれらは、認識対象と本質的にきりはなされた存在ではないのかわいか、いいかえれば、ほんとうに対象についての感覚であったのかわいか、という深刻な疑いを生じさせるのである。

こうした重大な難点は、カント認識論の延長上にある、中期フッサール哲学の現象学的認識論においていっそう著しい。

フッサールは、われわれにとって特定の意味ある対象が現われ出るには、意識の志向的（対象に意味を与える）作用が色感覚・音感覚・触感覚などのヒュレー（素材）的契機を活性化させながら統一的に把握することが、不可欠だと考えている。この場合、ヒュレーと呼ばれる諸感覚は、主体に体験されるだけで、それ自身では現われ出ることがない。統一的に把握する意識の作用によって、意味をうけとりはするが、諸感覚自身は、対象のもつ意味を少しも表現せず、いわば「非志向的」である。カントには、経験的な直観のうちに意味や意義の源泉を認める主張があるが、その点では、カントの感覚にもまして、フッサールの感覚は、対象の意味形成にまったく参与しない受動的で無力な存在として扱われている。彼にあっては、外的事物の实在性は「背理」であるとみなされ、それゆえ、カントにみられた感覚が「物からの触発」であるとする「半ば唯物論的」な主張は、完全に姿を消している。（後年フッサールは、「受動的総合」という概念で、意識の志向作用だけでなく、感覚の領域にも一定の能動性があることを示し、感覚的なものが部分的に意味形成に寄与することをみとめた。彼の感覚論のこのような修正は、現象学的主観主義がはらんでいる矛盾の表明でもある。）

このように、カントにせよフッサールにせよ、自らの構成主義的観念論の立場を維持するために、彼らは、経験や対象構成の主体として自我や意識の統一作用（カントでは統覚、フッサールでは統握のはたらき）に絶大な力をみとめる一方で、感覚的素材にはじつに貧弱な内容しか与えていない。言いかえれば、無力で無規定な感覚を前提にしてこそ、彼らの純粋なまでの構成主義も可能であったのである。

感覚は直接的で個別的だが、だからといって、それは対象のなんらの反映でもないのか、対象のもつ意味をまったく担わないのか。こうした問いによって、今やわれわれは、一見単純そうに見えるが、じつは認識論上最も難しく、それゆえこれまでさまざまな曲解をこうむってきた「反映」の問題にたどりつく。反映の問題は認識の真理問題と直結している。したがって、これについては章を改めて本格的に論及する必要があるが、これまでの論述との関係で、ここでは結論だけを述べておこう。

人間の感覚は、感覚と客観的事物をきりはなす構成主義者の主張とは反対に、部分的ではあれまちがいなく対象を反映する。そもそも感覚も、現象学風にいえば、「対象についての意識」なのであり、独自の志向性をもっている。ふと目に映ずる窓外の樹の葉の緑色、背中の一点に思わず感じる針による鋭い痛み、こうした感覚は、緑色の担い手が葉であるのか幹であるのか瞬時にはわからないにせよ、また痛みをひきおこした対象が何であるのか漠然としているにせよ、まぎれもなく、

樹木の葉や尖った針という一定の対象の性質を表示している。

感覚は、対象の何であるかを部分的に直接的に「告知知らせるもの」である。心理学の用語を使ってそれを「信号」といいかえてもよい。その意味で、感覚は直接的であるだけにそれだけ外的対象との強い結びつきを示している。対象を感覚する主体が身体であり、感覚や知覚が生まれるときには感覚器官や神経中枢が共同的にはたらくからといって、われわれは身体や感官・神経を感覚するわけではない。一本の鉛筆をつまんだとき、われわれは、前方に伸ばした自らの腕や手の筋肉の動きを感ずるのではなく、指の先に固くてすべすべした鉛筆の感触をうるのである。樹木の葉を見た場合でも、対象である葉の緑色を感覚しはするが、光の刺激をうけている目や神経の運動や性状を感覚してはいない。

現代生理学の教えるところによれば、外的事物の感覚や知覚にあたって、当然生じうる感官の状態変化についての信号や内受容器——生体の内的環境からの衝動をうけとる受容器——からのあらゆる衝動は、ほとんどすべてかあるいは著しく制止されて、われわれの前にある外的対象の像のみが生じるのである。しかもわれわれは、われわれの行動や生活にとって必要な刺激や信号を感知できる。すべての対象や刺激を感覚できるわけではない（周知のように、人間の目は380ミリマイクロンから780ミリマイクロンまでの波長以外の光を感覚できず、耳は16サイクルから2万サイクルの振動数以外の音を感覚できぬ）が、現にもっている諸感官を通じて時には観測機器の助けをかりて、われわれは、種々の危険を回避しながら自らの行動を方向づけることができる。われわれの身体は、生活上、自らに必要な感覚と不必要な感覚とを、無意識的にしかも適切に取捨選択している。

思えば、対象への感官のこの適応能力はまことに驚異である。人間の長い進化の過程で、人間の感覚諸器官が環境世界との相互作用を通じていかに着実に発達してきたか、その結果、対象を直観し認知する上でいかにすぐれた合目的的本性を獲得するにいたったかを、私は一種の感動をもってうけとめざるをえない。